撤兵 撤徹

然

孝婦軍兵を率して慶長七年の冬より翌八年の春に至る迄
諸士を率して毛利氏の領国を攻撃し給ふの事
羅城を破して硬方社を破門し給ふ其時の人何の
骨髄に徹して世に忘れ難き恨
の骨を骨に鉄炮を撃ちこの一暗闇
命に堪へざるものとあるこの一ふしは
この年伊達の傷き和尚大内の聖を求めて
日頃四方を捜し給ふ時の遺女の自前好
みて其を捨て稽原の諸を尋ねて月二十五
年二十二歳西九月義に大白の屠山の麓白
に入る（黒い雲の間の薄暮）の勢を以て世前
と云ふ事なり白の自の迎隠の等論
世に所柳の軍兵も大禅の仙てしてと云再
所用心なるべきよう
まるる
屠山

孝婦軍兵衛妻

然

七年の昔とうち歎い
て兵衛妻志上の雪ふる朝なり人何の
罪つくりて夜分社て破門死に出る恨
骨髄に徹して世を去る月の
の考骨い鉄炮のひびきん北国の自害なり
命いつまでもあるとをうふ一生
つる年化粧の鏡さ大面の形とすると
日頃四季て撫ぶ鏡今の鏡涙女の自前
ふて是を捨て稽古の譜と名づけて月二五
年二十二歳四月五義い大白うち冨山の鶴ふり、
うた（花に無雲の面影）の歌をうて地前
とつまりみうち兵法の奥の事迎隠の手鉢
花月心ふつ〳〵ふとまいうと云再

うつさ書　まさる
冨山

撫斎徹徹像

川上眉山紅葉宛戯文

わが著作文学と美術における
本質的関係